



パートナーシップの力



妊産婦ケアを受けた母親から生まれ、すばらしい産声をあげる途上国の赤ちゃんの後ろには、Change for Good[®]（チェンジ・フォー・グッド）の袋の中にコインを入れてくれた旅行者の姿がある。抗レトロウィルス薬治療のおかげでHIVに感染することなく生まれてきた乳児の後ろには、「子どもたちのために、エイズと闘おう」キャンペーンに賛同してくれた著名人がいる。学校の門戸が女子に開放された日、生まれて初めて、教室の中へスキップして入っていく女の子の後ろには、女の子にも教育の権利があることを訴えたイマーム（イスラム教の宣教師）の姿がある。不発弾ではなく、サッカーボールを蹴る子どもの後ろには、「子どものために。平和のために」キャンペーンのもとに集結したスポーツ選手の姿がある。

ユニセフとともに活動しているのは、公には賞賛されることのない、陰のヒーローたち。すべての子どもに、その可能性を最大限に発揮するための機会と資源が与えられるように——その日を目指して努力している英雄たちである。グローバル・アライアンス（多国間にわたる企業協力）であろうと、信仰に基づいて社会奉仕活動を行う組織、企業、あるいは個人とのパートナーシップであろうと、ユニセフが組むパートナーシップは、負担を軽減し、成果を高めるものなのである。

開発のためのスポーツ

スポーツ・イベントで沸き起こる大歓声。それは、競技場で展開される競技や試合に対してだけ送られているものとは限らない。多くのファンは、子どもたちのために力を合わせて努力するアスリート、チーム、リーグに対して拍手を送っているのである。スポーツ界は、ミレニアム開発目標の達成を支援する、非常に重要なツールを提供してくれた。スポーツ界とのパートナーシップは、アドボカシー、広報、ブランドの構築、資金集めおよびプログラム実施のために活用されているのである。



2006年、ユニセフは全米プロバスケットボール協会（NBA）とパートナーシップを組み、エイズに関する意識啓発と予防を呼びかける公共広告を制作した。ナショナル・リーグの社会的責任イニシアティブ「NBAケアーズ」の一環として、バスケットボールのスター選手たちが「子どもたちのために、エイズと闘おう」キャンペーンの多言語広告に参加したのである。この広告では、HIVの母子感染予防、若者の間の感染防止、HIV/エイズの影響を受ける子どもたちの保護と支援に焦点をあてている。

ユニセフと国際サッカー連盟（FIFA）は、2006ワールドカップ® ドイツ大会に集まったサッカーファンから、「子どものために。平和のために」キャンペーンへの賛同を集めるべく、力を合わせた。FIFAは、コミュニティ、国家、世界に調和と寛容の精神をもたらすべくサッカーの力を借りるとともに、子どもたちのために平和な世界を築きあげるという誓いを立てるよう、サッカーファンの人々に呼びかけたのである。準々決勝のキックオフ直前、各チームのキャプテンたちは、人種差別に反対する宣言文を読み上げた。また、各チームと公認審判員たちは、「人種差別にノーと言おう」と書かれたバナーのもとで写真撮影のためにポーズをとった。これに加えて、ユニセフとFIFAの公共広告がMTVとESPNの世界的ネットワークを通じて放映され、これを観

た多くの人々がユニセフのウェブサイトを訪れた。

国際クリケット評議会は、エイズ「根絶」^{ランアウト}を支援すべく、チャンピオン・トロフィー 2006準決勝に対する注目度の高さを利用した。HIVに関わる差別や偏見をなくそうと、選手と審判がHIV/エイズと共に生きる人たちとの団結を象徴するレッドリボンを身につけた。そのほか、一般の人々の意識啓発を促すキャンペーンとしては、評議会のクリケット・プログラムを通じて実施された、若者向けのHIV教育ワークショップなどがある。

男子プロテニス協会（ATP）と新たにユニセフ親善大使に任命されたロジャー・フェデラーは、「フェデラー・ベアー」ビーニー・ベイビーズ®を製作。2006年の秋と冬に売り出し、販売からの収益はACE（Assisting Children Everywhere）に寄付された。ACEは、ATPとユニセフが、世界中の子どもたちの保健、教育、保護のために力を注ぐパートナーシップである。

FCバルセロナ（FCB）は、「クラブ以上の存在。困難な状況に置かれた子どもたちに、世界規模の新たな希望を」をモットーに、ユニセフとの5年間にわたるパートナーシップを発表。人道的な危機の際に影響を受けたり、あるいはエイズの影響を受ける子どもと若者の保護に取り組むことを誓った。チームは、毎年最低150万ユーロ（200万米ドル相当）を拠出することになっている。初年度の拠出は、HIVの母子感染予防、小児治療の提供、若者の間のHIV感染予防、およびエイズにより親を失った子どもまたは困難な状況に陥った子どもの保護を目的とするスワジランドのプログラムに使われる。また、FCバルセロナが公表した新しいユニフォームの胸元には、ユニセフのロゴがあしらわれている。6,000万人のファンを擁するFCバルセロナは、その人気を子どもとユニセフに対する意識啓発のために役立てようとしているのである。



企業との連携

企業の間では、現在、企業の社会的責任に配慮したビジネス慣習を導入する傾向が強まっている。いまや企業のフィランソロピーは慈善的募金の枠を超え、社会的投資の実施や、コアとなる商慣習のうち社会的価値に関わる部分の評価、社会開発のための政策・行動を促進するパートナーシップの構築を行うまでに発展している。

ユニセフは企業との提携がもたらす価値を認め、これを育む努力をしている。企業パートナーとユニセフは、共に資源を動員し、プログラムや政策を策定、アドボカシー・イニシアティブや意識啓発キャンペーンを計画・実施してきた。

2006年に、企業とのパートナーシップや提携によるユニセフへの拠出は、9,400万米ドル近くにはのぼった。ユニセフの国内委員会と各国事務所との真摯な募金活動、そして協働努力により、企業との提携は子ども、家族、そしてコミュニティの人々を巻き込み、地元レベルで根付いている。

パートナーシップがもたらす力と望みを強く信じて、ユニセフは企業部門に関する厳格なガイドラインを採用し、ユニセフの中心的な価値観を分かち合い、共感してくれる企業や組織との長期的な戦略的提携を模索している。ユニセフは、企業部門に対して、子どもに恩恵をもたらす、持続可能な商慣習やプロジェクトに投資するよう、呼びかけているのである。

ユニセフは、多様な活動を通じて民間部門の多数の企業の協力を得ているが、その支援は、現金による拠出、物資の提供、戦略的なフィランソロピー投資、技術的な知識や専門知識の交換などに及んでいる。協力企業は多岐にわたるが、その協力の範囲もそれと同じくらいに多様であり、企業ネットワークの活性化や利用から、従業員や顧客による募金の促進、プログラムやイニシアティブの共同開発、子どもの健康や福祉に関する議論の促進・広報にまで及ぶ。どのような形であれ、ユニセフは、互いにとって利益がもたらされるような関係を築き、子どもたちのための資源と投資が最大限の効果をもたらすように、最善を尽くしている。



企業パートナーはユニセフの数々の活動を支援しており、この中には、子どもの生存、教育、HIV感染の防止、緊急事態における人道支援が含まれている。ユニセフに協力してくれている企業の一例としては、質の高い基礎教育を支援する金融業界の一流企業や、子どもたちの命を救う予防接種活動を支援する物流業界のリーディングカンパニーがある。

2006年にユニセフに協力した企業の一部を、41ページに掲載した。



公共・民間部門にまたがるパートナーシップ

公共部門と民間部門が協働して手を結ぶと、資金、革新、そして大きな望みを生み出すことができる。国際的レベルで見ると、公共・民間部門をまたぐ3つの世界的なパートナーシップが、子どもと家族の生活を改善するための努力を推し進めた。すなわち、GAVI同盟、栄養改善のための世界同盟（GAIN）と世界エイズ・結核・マラリア対策基金（世界基金）である。国家レベルにおいても、例えば、カナダの微量栄養素イニシアティブのような公共・民間部門をまたぐ連携により、開発途上国の子どもと母親のための目覚ましい成果がもたらされている。

GAINは、栄養強化食品や栄養促進を目的とするそのほかのメカニズムのための資金や技術的助言を提供することで、栄養不良の削減に取り組んでいる。このパートナーシップのもとには、飢餓に苦しむ人々を支援するために、開発機関、各国政府、財団、産業界が集結している。

GAVI同盟（以前は「ワクチンと予防接種のための世界的同盟」という名前で知られていた）は、開発途上国の子どもたちにワクチンを提供している。2006年に、GAVI同盟は、子どもたちの命を奪う最大の脅威を和らげるために、2種類のワクチンを提供した。ひとつは下痢性疾患を引き起こすロタウィルスを防ぐワクチン、もうひとつは、肺炎、髄膜炎、敗血症を引き起こす主要因である肺炎球菌を防いでくれるワクチンである。

世界エイズ・結核・マラリア対策基金は、世界

でもっとも多くの人々の命を奪っている病気のうち、これらの3つを根絶するための闘いに資金を調達・管理し、提供している。この世界基金は、多国間および二国間支援を行う組織と協働で、もっとも大きなニーズを抱える地域に資源を振り向けている。

これら3つの世界的パートナーシップは資金を提供するもので、支援現場での直接の活動には携わっていない。しかし、途上国の人々はみな、その貢献を肌身に感じているのである。

イラクでは、世界的なパートナーシップにより、予防接種を行う何千もの人々が一軒一軒の家を回ってポリオの予防接種を実施し、そのおかげで480万人もの子どもたちが予防接種を受けることができた。2006年には、2億2,000万人を超える子どもたちがはしかの予防接種を受けている。また、これらのパートナーシップのおかげで、ナイジェリアで2006年に行われた予防接種キャンペーンでは、およそ2,600万人の子どもたちがはしかの予防接種を受けることができた。ウズベキスタンでは、栄養が強化された小麦粉の配布プログラムのおかげで、貧血症を患う5歳未満児の子どものうち、33%の健康が改善されている。その原動力となっているのが、公共・民間部門のパートナーシップなのである。

国会議員

列国議会同盟（IPU）はユニセフの強力なパートナーのひとつであり、子どもの問題に脚光を当てるべく協力している。2006年の協働努力の主要テーマは暴力、搾取、虐待からの子どもの保護であった。2月、IPUとユニセフは、ベトナム国会の招聘を受け、ハノイでセミナーを開催した。セミナーには東南アジア諸国連合（ASEAN）の13カ国、80人の国会議員が参加し、子どもの人身売買、および子どもに対する暴力を防ぐためにはどうしたらよいか、意見を交換した。

2006年5月に開催された、列国議会同盟第114回総会において、IPUとユニセフは、子どもとエイズに関するパネル・ディスカッションの場を設けた。議員たちは、エイズを取り巻く沈黙を破り、子どもを対象に含めた包括的な政策立案と立法、および十分な資金の割り当てを行うとともに、エイズの影響

を受ける家族やコミュニティを支援するよう促された。

組織の研究能力の向上を図るべく、1988年に設立されたユニセフ・イノチェンティ研究センターは、子どもを保護するために議員に何ができるか、データに基づく事例を通じてIPUとユニセフの活動を知らしめている。2007年には、双方で合意された4年間にわたる新規のプログラムが始まり、子どもの搾取根絶のために活動する議員が、最新の情報や研究、ガイダンスを利用できるようになる予定である。



ユニセフ国内委員会

アンドラ国内委員会
オーストラリア国内委員会
オーストリア国内委員会
ベルギー国内委員会
カナダ国内委員会
チェコ国内委員会
デンマーク国内委員会
オランダ国内委員会
エストニア国内委員会
フィンランド国内委員会
フランス国内委員会
ドイツ国内委員会
ギリシャ国内委員会
香港国内委員会
ハンガリー国内委員会
アイスランド国内委員会
アイルランド国内委員会
イスラエル国内委員会
イタリア国内委員会
ユニセフ日本委員会(財団法人日本ユニセフ協会)
韓国国内委員会
ラトビア国内委員会
リトアニア国内委員会
ルクセンブルク国内委員会
ニュージーランド国内委員会
ノルウェー国内委員会
ポーランド国内委員会
ポルトガル国内委員会
サンマリノ国内委員会
スロバキア国内委員会
スロベニア国内委員会
スペイン国内委員会
スウェーデン国内委員会
スイス国内委員会
トルコ国内委員会
英国国内委員会
米国国内委員会

国内委員会

ユニセフの財源は、すべて任意拠出によって成り立っている。37ある国内委員会は、ユニセフの生命線となっており、ユニセフの年間収入のおよそ3分の1を集めている。一番新しくできた国内委員会であるアイスランド国内委員会は、アイスランドの人口の2%を超える人々から定期的な募金協力を得ることに成功し、評判となった。

募金活動は、国内委員会が取り組む多くの重要な活動のうちのひとつにすぎない。2006年、米国国内委員会は、CNNによるチャド、スーダン・ダルフルおよびコンゴ民主共和国への訪問を設定した。CNNは“Killing Fields: Africa's misery, the world's shame”を放送。同番組では、ジャーナリストのアンダーソン・クーパーとドクター・サンジェイ・グプタ（CNNの医療担当チーフ）がチャドとスーダンの国境で実施されているユニセフ活動の現場を訪れるとともに、コンゴ民主共和国のプログラムの取材も行った。

スイス国内委員会は、女性器切除への意識啓発を目的とする大々的なキャンペーンを、2006年2月と3月に行った。一般大衆に向けて郵便、広告、メディアを通じて訴えかけ、この危険な慣習の根絶を呼びかけた。これらの活動は、ソマリア生まれの作家、ファドゥマ・コロンによる朗読会、ベナン生まれの歌手でユニセフ親善大使のアンジェリーク・キジョーのコンサートの開催にもつながった。

国内委員会は、「子どもたちのために、エイズと闘おう」キャンペーンを突き動かす原動力ともなっている。国内委員会は、このキャンペーンの最初の段階からすべての段階にわたって関わってきた。国内委員会は、コア・グループに加わり、運営委員会に携わり、ほかの国連機関やNGO、ドナー政府とも会合を重ねた。この世界的キャンペーンは2005年に始まったが、以来国内委員会は、このキャンペーンの勢いを持続させるべく、力を注いでいる。デンマーク国内委員会は、2006年、「子どもたちのために、エイズと闘おう」キャンペーンの関連イベントを実施。大きな注目を浴びたこのイベントでは、アレクサンドラ・デンマーク王妃殿下がエイズの蔓延に終止符を打つために行動を起こそうという呼びかけに協力した。デンマークでは、国内委員会の働きによって、企業スポンサー、一般の募金協力者、親善大使、デンマーク外務省、そのほかの人々がエイズとの闘いの輪に加わった。

6月には、「開発のための教育」の運動に弾みをつけるべく、18の国内委員会の代表たちがモロッコのラバトに集まった。この場では、教育支援の花を咲かせようとする参加者たちによってタネがまかれ、それぞれがこの運動を各国に持ち帰ってフォローすることになった。各国の代表者たちは、先進工業国と開発途上国の双方で、子どもたちが教育の権利を享受することができるよう、努力を傾けることを誓った。



若者たち

子どもと若者たちは、ありとあらゆる方法で社会に貢献している。溢れんばかりのエネルギー、粘り強さ、そして理想主義を持つ若者たちは、一見不可能とも思える課題への挑戦を前にしたとき、最善のパートナーとなることが多い。物怖じすることなく、返答に窮するような質問を投げかけ、現状に立ち向かう若者たちは、もう少し長く働くように、もう少し努力するように、そしてもっと夢を持つようにとおとなたちを駆り立てる。そうした理由があるからこそ、ユニセフは世界中において、彼らのエネルギーをパートナーシップの中で活かそうとしているのである。

ユニセフが開設した若者向けのサイバースペース・フォーラム、「Voices of Youth（若者たちの声）」を一瞥しただけでも、若者たちの情熱と洞察力をうかがい知ることができる。アイデアや情報の交換を通じて、世界中の子どもたちが開発と人権に関わる問題を分析しているのである。2006年、Voices of Youth には180カ国のユーザーがアクセスしたが、うち60%以上が途上国の人々であった。オンライン上の討論に最も活発に参加したのは、15歳から19歳の若者たち。2006年にVoices of Youth に参加した若者3万人の半数以上が女子で、同サイト・

ユーザーの55%を占めた。

若いリーダーたちは、ウェブで討論しているだけではない。市民グループ、信仰に基づいて社会奉仕活動を行う組織、学校、大学の中でも、多くの若者たちがユニセフのプロジェクトや目標を支援している。ルーマニアでは、「ザ・ファイターズ」という若者のネットワークがあり、若者が集まる街などに繰り出して、HIVの感染予防を訴えたり、HIV感染に伴う偏見や差別の問題に終止符を打とうと努力している。HIVに感染した若者が始めたこのネットワークの活動は、ユニセフが学校で行うエイズ予防プログラムを補完するものとなっている。

エジプトでは、ユニセフが支援する「ニュー・ホライズン（新しい地平線）」というプロジェクトを通じて若い女性がトレーニングを受け、薬物の乱用、性と生殖に関する健康、性感染症、女性器切除、児童婚などの健康に関わる問題について同年代の若者に知識を伝える方法を学んでいる。同様のプロジェクトで、若い男性を対象にした「ニュー・ビジョン（新しい視野）」と呼ばれるプロジェクトも開発された。

国際舞台では、カナダのトロントで開催された第16回国際エイズ会議に、80カ国から1,000人を超える若者が集まった。若い活動家たちは、世界のリーダーたちに影響を与え、治療、ケア、予防対策の強化を図るという約束に対する説明責任を遂行させるべく、2年に一度開かれるこのイベントに集結したのである。

子どもと若者は、国連事務総長による『子どもに対する暴力に関する調査報告書』の調査においても有益な役目を果たした。この研究は、ブラジルの人権専門家であり大学教授でもあるパウロ・セルジオ・ピニエイロが主導し、ユニセフ、国連人権高等弁務官事務所、世界保健機関（WHO）が支援したものである。若者たちは、この研究の計画段階に開かれた国家レベルあるいは地域レベルの会合において、自身の体験や意見を話してくれた。彼らはまた、この研究において、調査、データ分析、ウェブサイトの立ち上げなどにも尽力した。



目的を目指す多くの力

開発途上国の子どもたちが直面する問題は、いかなる組織をもってしても、その組織単独で解決できるものではない。ユニセフは、子どもにふさわしい世界を追求する中で、ほかの機関や組織と価値観を共有し、努力を集結することによって、より強い力を得ている。持続可能な開発につづく道は、個人、市民社会組織、フィランソロピーの

精神に基づく財団、信仰に基づいて社会奉仕活動を行う組織、学術・研究機関、子どもと若者、皆が築きあげているものである。それぞれがたどる道は異なっているかもしれない。だが、その目的地は一カ所しかない——我々はみな、すべての子どもたちに希望に満ちた未来を贈るという目標に向かって、歩みつづけているのである。

FTSE4Goodに加わる企業

企業の社会的責任（CSR）がキャッチフレーズになる前から、FTSEグループは、人道主義と利潤の追求が相容れないものではないことを認識していた。フィナンシャル・タイムズ社とロンドン証券取引所が保有するこの投資インデックス企業は、1996年、クリスマス・カードを顧客に送る代わりに、ユニセフに募金をした。翌年、ユニセフとこの企業は手を組み、拠出金を作り出す債券をヨーロッパにおいてプロモートし始めた。この「ゼロ・バリュー永久債」は、ラテンアメリカとカリブ海諸国におけるユニセフの事業のために、67万米ドルを超える資金を生み出したのである。

しかし、CSRの頂点を極めたものは2001年に現われた。FTSEが、倫理的な行動を行っている企業の株式を対象とする初のグローバル・インデックスシリーズ、FTSE4Goodを導入したのである。この新たなインデックスシリーズができたことで、FTSE4Goodグローバル・インデックスに採用されるために、企業は、すでに原則化されていたビジネス慣習をさらに向上させる必要ができたのである。今日、社会的責任を果たす企業とは、環境の持続可能性の実現、ステークホルダーとのポジティブな関係の構築、普遍的な人権の尊重と保護、サプライ・チェーンにおける良質な労働基準の確保、および賄賂や汚職との決別に取り組む企業と定義されている。

ほかの企業の慣行をモニタリングすることに加え、FTSEは自らが倫理的ビジネス基準のモデルとなる役割を認識し、ユニセフに対して、インデックスの恩恵がすべてユニセフに行くようにしたいと申し出た。FTSEは、FTSE4Goodのライセンスング代をすべてユニセフに拠出するとともに、データ・ベンダーを通じて投資家がFTSE4Goodインデックスシリーズにアクセスするたびに、50ペンスを寄付している。

FTSE4Goodは、インデックスの開始から2006年末までに、総額で250万米ドルをユニセフのために集めた。この拠出をもとに、ベトナムとザンビアでは水のプロジェクトが実施され、25の掘り込み式の井戸を設置、9つの学校とその周辺のコミュニティの人々が恩恵を受けた。その数は、推定2,000人の子どもを含め、約6,000人にのぼる。現在は、ギニアで、人身売買の被害に遭う危険性の高い子どもや若い女性20万人以上の保護に取り組む、2年間のプロジェクトを支援している。

また、FTSEは、従業員に対してユニセフの活動に自ら参加するよう促している。毎年、彼らはユニセフから提示されたいくつかの候補の中から、投票でひとつの支援プロジェクトを決めている。また、これまでに、多くの従業員がユニセフのプログラムが行われている支援現場を訪れている。FTSEの社員たちは、ユニセフ英国国内委員会を通じて、ギニアのある女の子——幼い頃に戦争によって避難民となった——と電子メールで言葉を交わしたこともある。最近では、ギニアのユニセフ・プログラム担当官がロンドンのFTSE社を訪れ、人身売買防止プロジェクトとその恩恵を受けている子どもたちについて、最新の情報を伝えた。

今日、世界の有資格企業の約40%がFTSE4Goodの基準を満たし、より良き企業市民になるための条件はハードルが高いとはいえ、決して達成しえないものではないことを示している。FTSEグループは、「責任ある投資部」を通じて、各企業が基準を満たせるよう指導し、助言を提供している。同部署では、新たな基準が導入された場合に影響を受ける企業が、基準の変更内容、および新たな基準に対応するための要件を十分把握できるよう、支援しているのである。

FTSEの最高責任者であり、ユニセフの名誉フェローであるマーク・メイクピースは、ほかの企業に対してもユニセフを支援するよう働きかけてきた。メイクピースは、ほかの企業の最高経営責任者らと共に、最近ユニセフが設定したザンビア視察に参加。ビジネス界の人脈を広げ、企業にとって持続可能な開発がいかに大切なものか、その重要性について議論を交わしたのである。

「ユニセフと共に活動することは、FTSEの文化の中で大切な要素のひとつである」とメイクピース氏は述べている。「従業員は、資金を集めているだけでなく、全員がユニセフの掲げる目標を理解し、その実現を支援しているのだ。FTSEは、世界中の企業に対して、ユニセフのキャンペーンを支援するように促している。例えば、HIV/エイズがアフリカ南部の子どもたちに及ぼしている破壊的影響に早急に対処する必要性などについてである。我々は、ユニセフが行っているすばらしい活動を支援するよう、ビジネス界全体に呼びかけたいのだ」